

6人いる。長期予報といっても、日本の場合とは異なり、夏のモンスーンの前報がその全てであるといってもいいだろう。インドの年降水量に対し、6～9月の降水量は40%～95%（平均70%）を占めている。気温の前報も短期予報では大切だが、長期予報とりわけ夏期の長期予報にはニーズは余り大きくないようである。モンスーンの前報は、第2表に示した通り3回発表される。4月初めまでにモンスーン Onset の前報が発表されるが、これは半島の南端部における Onset を予報するだけで、ボンベイ、ニューデリー等の地点については予報していない。降水量の前報は2度発表される。予報区は、第3図に示した、「半島部」と「北西インド」の2つである。前報は7階級で表示される。南部および東部については前報は発表されない。これは技術的な問題によるとのことである。南部の地域は夏の南西モンスーンの終了と相前後して、北東モンスーンによる降水が10～12月に継続してあるため、両者を区別できないのが現状であるという説明だった。

冬にも降水量の前報を発表している。これは北部の冬小表の生産地域を対象したもので、1月初めに、1～3月の降水量前報を発表している。

広大なインドを2つの予報区で、しかも特定の区域は予報区からはずしているが、ユーザーからは予報区の細分化と残りの区域の前報発表に対する強い要望がある。そのため、現在、インド全体を35*の予報区に分けて、実験的に降水量の1カ月予報を行っている。しかし、成績が良くないので公表していない。残り2区域のモンスーン前報にしても、一度始めたら技術的な理由で中止することは難しいので、要望は強いが前報を始める計画は現時点ではないとのことだった。

* Thapliyal (1986) によると予報区は31である。

〈おわりに〉

筆者が東京を出発した4月13日の最高気温は17.1°Cで、半袖シャツではまだ寒を感じるほどだった。ニューデリー滞在中、またプーナでも日最高気温は40°Cに迫る暑さだった。6月までの2カ月間はインドの真夏とは聞いていたが、焼けるような暑さとは、まさに言葉どおりだった。もっともこの時期は夜間に20°C位まで気温が下がるので、さわやかな夜を過ごすことができた。新聞の天気欄には、3月からの積算降水量と平年偏差が掲載されていた。ニューデリーより南部では平年以下の地域が多く、新聞はグジャラート州（ニューデリーの南西）などで干ばつが深刻化していることを伝えていた。昨夏、インドは35%の地域が drought condition であった。水源のほとんどを夏のモンスーンに依存する多くの地域で、モンスーン期の少雨は、次のモンスーンまでの1年間、水不足を余儀なくされるわけである。モンスーン長期予報100年の歴史は、結局の所、この干ばつの農業・社会生活への影響を最少限に食い止めるための自然との闘争史だったのではないだろうか。

長期予報100年を記念して、インド気象局は Sir G. Walker の著作集を刊行した。彼等が発見した南方振動は、エル・ニーニョ現象とともに、長期予報研究・実務に係わる人々の間で、今最も注目されている。ところが実際のモンスーン前報では、SOI の占める位置は筆者が当初予想していた程大きくはないような印象を受けた。南方振動の発見から50年以上も経て、現在 TOGA (Tropical Ocean and Global Atmosphere) 計画がすすめられている。この計画が終わるころまでには、インド・モンスーンと南方振動との関係にも新たな解釈が生まれるだろうことを期待したい。

最後に、岸保勘三郎先生と朝倉正博士から、講演について種々御指導いただいた。記して謝意を表します。

第16回太平洋学術会議のお知らせ

韓国の Seoul において1987年8月20～30日の間、第16回太平洋学術会議が開催される予定であり、その Second Circular が最近届きました。気象学および大気物理学関係 (H.K. Cho 教授 (Yonsei 大学)) の主なテーマは

熱帯およびモンスーン気象

S.E. Moon 教授 (Pusan 国立大学)

太平洋域の大気大循環

C.H. Joung 教授 (Seoul 国立大学)

メソ気象学と Severe local storms

H.J. Son 博士 (中央気象局)

気候学の工業への応用

M.I. Kim 博士 (中央気象局)

その他

S.M. Lee 教授 (Yonsei 大学)

() 内は Organizer を示す。

この Second Circular は気象学会の事務局にありますので、詳細は同事務局にお問い合わせ下さい。

(文責: 山元龍三郎)